

第3回県都デザイン懇話会 議事要旨

資料1

日 時 平成24年10月22日(月) 13:30~16:40

場 所 福井県織協ビル 801会議室

議 題 県都デザイン 骨子について

出席委員：西村座長、国吉委員、小浦委員、五百旗頭委員、開発委員、下川委員、吉田委員、
竹内委員

委員からの主な発言内容

(歴史を象徴し、人が集まる中心となる「福井城址公園」の整備)

- ・お堀周辺にボードウォークを作ってお堀の中に道を張り出すなど、魅力的な歩道がお堀の外側を巡り、そこを正面として建物が建っていくような工夫が必要。
- ・県庁が移転して公園になる遠い未来に辿りつくまでに、生活やまちの状況も変わり、高齢化も進む。散歩道ができてお堀と石垣を感じられるなど、点の資源を身近に近づけるような取組みを継続することが、長期的ビジョンをつないでいくためには重要。
- ・石垣の周りはとても重要。 天守閣はなくても、夕方や夜にはライトがあって、安心して夜の散策ができ、古い時代を偲ぶというような、いぶし銀のような整備の仕方もある。
- ・県民会館跡地と中央公園と一体化させながら空間を改善していく中で、いろんな人たちが気持ちや希望が言えたり、仕組みを提案できたり、作業のプロセスが見えると、もっと関心が高まる。 それがある程度実現されていくと、都市に対する気持ちが随分違ってくる。
- ・県民会館跡地は良いチャンス。 これまでのような行政的な整備のプロセスと少し違う市民の関わり方ができる、一つの実験場みたいにできるとよい。

(地域の歴史を実感できる都市空間の形成)

- ・近隣との連続性を考慮した民間側の景観づくりを進めるために、具体的な方向性をつくって、自治会に入り、地区の景観づくりを指導することが必要。
- ・「歴史・文化の回廊形成」というイメージによって歴史文化をつなぎながら、地域を巻き込んだテーマ性のある通りの景観形成を実施する必要がある。
- ・地区のテーマに応じた景観づくりに調和を与えるという目的で、通りに樹木を配置していき、各地区を緑でつないでいくと良いのではないか。
- ・地区のテーマにあった機能を挿入するための空地の活用も考えたらよい。
- ・動的な長距離のルートには観光案内の機能もしっかり作っていくべき。
- ・「歴史・文化の回廊」の考え方が、道の作り方、道の角や角への広場の作り方にも影響する。
- ・歴史も感じさせながら新しくしていく巧妙なデザインを取り入れたい。例えば、通り毎に一部の建物の一角に、歴史と新しいものを両方感じられるギャラリーや、県下市町のショーケースや文化のショールームが組み込まれ、「歴史・文化の回廊」としてつながっていく。

- ・スポット的に残っているところをつなぐルートを決める。例えば路上にペインティングし、
 どのようなルートにするかは数年毎に市民で決めていくことも考えられる。
- ・歴史的建造物地域に開放して活用できるかどうかが重要な焦点になる。水道記念館を足羽
 山の地区の活動の場に開放し、地域の人々の活動拠点とできると歴史的建造物に対する意
 識を変えるきっかけになる。

(文化を受け継ぎ、育てる県都の実現)

- ・駅前商店街のエリアをアートの発信源にするということはとても良い方法。城址や中心の
 エリアに美術館を持ってくるというのも良い。それとタイアップして、アートを発信する
 小さな拠点があちこちにあるような状態に持ち込むことが重要だと思う。
- ・魚などの生鮮食品も含めて、福井のいい食材が手に入る場所が中心部にあることが重要だ
 と思う。もちろんそれは観光資源にもなる。
- ・周辺の市町との文化的な交流という観点が必要。嶺北一帯には、非常に深い味わいのある
 市町が集まっているので、例えば屋台村など連携を考えるべき。
- ・駅前に、工芸品など福井県内の良いものをまとまって買え、産地とつながっていて、定期
 的に品が変わり、産地へと人を引っ張っていくイベントもあるような場があるといい。
- ・郊外のショッピングセンターのような、消費者が商品を比べたり、ニーズに対応できるよ
 うな工夫が、既成の商店街でも必要ではないか。
- ・新栄商店街は迷路性がある面白い空間で可能性がある。空間の価値をちゃんと見せること。
 元気のいい店もある。元気がいい理由をちゃんと見れば可能性は見えてくる。
- ・産地としての産業や食文化を組み合わせた独自のアートの展開ができるのではないか。
- ・アートは無からつくり、既存の資源（吹奏楽や川柳など）を有効利用すべき。観光資源
 がある場所に、いい川柳や俳句がショーケースに入って飾ってあっても良い。
- ・色んなものに亀裂が入ってなかなか残っていない中で、人がしっかり育ててきたというの
 が、教育県としての福井の強みではないか。

(緑豊かな風格ある都市への再編)

- ・大きなビジョンを持つとともに、一つ一つの動いていることを共通の意志を持ってマネジ
 メントし、良い方向に持っていき、見える形としていくことがデザインとして重要である。
- ・それぞれのまちよっての緑のあり方があり、どういう配置をするかが重要かと思う。
- ・50年先を目標にすることと、短期的にできることの両方がある。短期的にできることは、
ちょっとした工夫をやり続けることによって、本当の50年先のイメージに到達できる。
- ・福井駅前に降り立った方々の第一印象として、お城への見通しや期待感の作り方を工夫し
 たい。イベントなどが行いやすい空間をあらかじめつくっておくというのも大事かと思う。
- ・県庁や県警本部が動くまで、足元に工夫ができないか。例えば、歴史性を感じさせるショ
 ーケースが埋め込まれ、歩いて歴史が感じられるような仕掛けがあるとよい。公共がやる

- ことで、民間の既存のビルも一階部分を開放的にしてほしいということに説得力が出る。
- ・ 今あるビルも、まずは、せめて低層部だけでも、緑があり市民が近づける工夫をすべきではないか。 一階が開放的で、通りから中の活動が見えるだけでも、楽しさが出てくる。
 - ・ 短期的な戦略を工夫しながら、福井らしい演出とはどんなものか、学んでいきつつ作っていくことが重要ではないか。
 - ・ トライアンドエラーをある程度続けることもあるかもしれないので、作りこまないで、小さなものを埋め込んでいくというのものもあるかもしれない。
 - ・ これまでのような開発を誘導するのではなく、次の方向を見せていくような取り組みで、少しずつまちが変わっていく方法もあるのかなと思う。
 - ・ 都市模型を置いて、ビルや道路、お店、広場などの置き換えが出来たり、遊びながら触れるような場があると、自分のまちを実感できてよいと思う。
 - ・ 欧米やアジアでは、役所に模型が飾ってあるところが多い。新しいプロジェクトは模型に置いてみて、まちに合うかどうか確かめる。 せっかく模型を作られたので、うまく生かすようなことを考えるとよい。

(人や環境に優しい交通ネットワークの実現)

- ・ 高齢者にやさしいまちとして、マイカーを運転しないで生活できる空間を、少なくとも中心部においては実現することで、人に優しいまちとして福井に住んでみようと思われる。
- ・ 福井鉄道は延伸してつなぐことが必要。公共交通が分かりやすく結ばれ整ったまちとなる。
- ・ 駅前広場に結節し、東西方向などの新しいバスネットワークや、新しいバスに変わるシステムを導入するなど、どの都市も課題になっていることを、打ち上げる必要がある。
- ・ 雨や雪に濡れないでうまく乗り換えできると優しい駅となる。 その対応が形として、電停のデザインなどに反映されていると、市民のニーズに答えていると感じられる。
- ・ LRTは東西を結びつけて、循環させるくらい考えたらどうか。 循環させると、雪や雨にも対応でき、高齢者にも優しくなり、中心部にも来やすいのかなと思う。
- ・ EVをうまくまちなかに活用できれば、交通整理ができて、歩行者空間も有効につくりだせるのではないか。 城址周辺の界限は、EVと歩行者のみにして、その周辺に駐車場をつくるという大胆な案があっても良いのではないか。

(シンボルとしての足羽山、足羽川と緑がつながる空間の形成)

- ・ 足羽山は紅葉も楽しめるようにするとよい。
- ・ 里山は誰かが手入れをしないと荒れていく。愛着を持つための仕掛けが必要である。長期計画をプロに立ててもらいながら、みんなの庭として山に市民の記念樹を植えていくことを考えるとよい。50年後にはすばらしい足羽山になっているといいなと思う。
- ・ 堤防の桜は枯れたら植えられなくなると聞いている。桜は大事なので維持したいと思う。
- ・ 小さな毎日の生活の中で続けられる緑化をしていったらよい。

- ・人が手をかける部分と、在来植生を大事した、自然に生えてきたものを上手に利用して、そんなに手がかからないようにする部分があるといった工夫ができたらいと思う。
- ・足羽山は子供たちから見ると自分たちが住んでいる真ん中にある公園山。アスレチックや公園として、子供の育ちという観点から利用すべき。そうすると思いを持った子供たちが、里山として守っていけるのではないかと思う。
- ・足羽山は夜暗すぎるのではないか。生態系の事を考えると下手な事は言えないのかもしれないが、茶屋もあるのに暗すぎてなかなか近づきにくい。
- ・子どもを対象にして体験学習や散歩ができる「ビレッジ」として、頂上に上ると、福井市の中心部を一望できる、まちを眺める場所として足羽山を考えるとよい。
- ・まちの中から足羽山を眺める良い場所がない。まちの中から見えないのであれば、山が見えるようにうまく歩かせる工夫が必要。
- ・川が見えて山が見えるという意味では、浜町へ誘導することはとても重要。ここで福井の全体が感じられる。
- ・ワークショップでは、山や川、歴史に対して、キーワードとしてゆったりとしたひと時を過ごすというイメージを持っていた。これは重要な視点かなと思う。
- ・九十九橋のたもとが元々の都市の起点である。再整備はできないのかと思う。

(文化と活動の空間として足羽山、足羽川の再生)

- ・足羽川には川戸があり、水面が今と比べて随分高い位置にあり、水と近い姿であった。河川改修で今の姿になっており、昔の姿に戻すことは絶対にできない。これを前提として、何らかの形で、昔こうであったということを偲べるように、記憶に留めていけないか。
- ・九十九橋たもとの産物会所の事を偲べるようなもの、あるいは、県内の産物を集めて販売できる簡単なものが、歴史的な意味の説明とともにあってもよい。
- ・堤防とまちの間に道がなく、浜町と川は一体だったが元には戻せない。緑地化されている部分を、昔の姿を念頭に置きながら、地域の人達と連携できるような使い方があるとよい。
- ・桜橋や九十九橋で途切れる散歩道がつながっているとよい。簡単に川に降りて、川面で幕末の歴史を偲ぶことができるとよい。
- ・河川敷を恒常的に使おうというのは間違いではないか。自然な形で残しておき、そこを自由に利用していただくということだろう。
- ・桜の時期以外は、足羽川はきれいでない。川原も雑草が茂り放題で管理されていない。
- ・歴史的な意味では、九十九橋のたもとまで含めて浜町とするとよい。
- ・足羽山は夜の利用を考えると、利用客は増えるではないか。
- ・案内板だけでなく、ガイドしてくれる人がいて、外から来た人がそういう人と出会って、面白い話が聞けて良かったと思えることが偲ぶ観光地の生死の分かれ目かなと思う。
- ・金沢の犀川では、今日は水が多いとか、流れが速いとか、雨が降っているとか音で分かるのだが、そういう語りかける川というのが非常に大事だなと思う。

(推進方策)

- ・実際に空間を作っていく際に、国、県、市、民間同士それぞれの主体が情熱的に一生懸命やればやるほど全体が混乱していくことというのがよくあること。全てを揃えなくても、少しでもお互いが共有し、分かち合うことで、まちのトーンが出来てくる。
- ・境界の共通性や、ある一角は通りに沿って表情を変えようということを、議論して調整するシステムが大事。それを専門家が一方的に持ってくるのではなくて、地域の方も勉強して育て、組織に加わってくることが、最終的には個性をつくっていく。最初は大変だが、やり続けることで段々と育っていくと思う。
- ・地域の商業地の人も利用者の市民も意見を出す、ということをしてぶつかり合うなかで、地域としてどういう価値を選択していくかということをやってみてもよいのではないか。
- ・やり合う中で建設的な関係が出来てきて、それが福井ならではの継続的なマネジメント組織、活動組織につながり、色んな事業に対して働きかけていく。それが一番重要。
- ・推進方策に書かれている3つは全て大事なので、同時にやりながら、県民、市民レベルのコンセンサスをきちんと形成していくということが非常に重要でないかなと思う。
- ・コンペをする上でのオリエンテーションが非常に重要。どの軸で評価するかを明確に指し示して、その上でコンペする必要がある。
- ・地域のコンセンサスを形成し、歴史の意図を辿って高度な次元で、未来志向で歴史を具象化すること。それを踏まえて、きちんと仕事していただける、県内外からの英知を集めていただきたい。

(その他全体に関すること)

- ・地域間競争、北陸三県と京都とどう差別化するかということ、短期、長期という時間軸の中に必ず入れていかななくてはいけない。
- ・よそがやっていることは有る程度きちんと踏襲する同質化戦略、差別化できるところは徹底してここぞ福井と打ち出す、未来志向型の差別化戦略。それをいかにするか、戦略として打ち出していく必要がある。
- ・民間にもう少し期待してもよい。まちづくりの方向性を出して刺激してあげることで、それに感化された人たちに新しい投資をしようという機運が生まれる。